

妙法蓮華經方便品第二

迹門・正宗分・略開三顯一・長行
爾の時に世尊、三昧より安詳として起ちて、舍利弗に告げた

まわく、

寄言歎二智・歎諸仏權実二智・歎二智・歎実智 歎權智
諸仏の智慧は甚深無量なり。其の智慧の門は難解難入なり。

一切の声聞、辟支仏の知ること能わざる所なり。所以は何

ん。仏會て、百千万億無數の諸仏に親近し、尽くして諸仏

の無量の道法を行じ、勇猛精進して、名稱普く聞こえ

たまえり。甚深未曾有の法を成就して、宜しきに随つて説

きたもう所、意趣解し難し。

歎釈迦權実二智・歎二智・歎実智 歎權智
舍利弗、吾れ成仏してより已來、種種の因縁、種種の譬喩

をもつてひろ広く言教を演べ、むしゆ無數の方便をもつて衆生を引導

して、もろもろ諸の著を離れしむ。ゆえん所以は何ん。如来は方便、知見

波羅蜜、皆已に具足せり。結二智・結實智舍利弗、如来の知見は廣大深遠

なり。結權智無量、無礙、力、無所畏、禪定、解脫、三昧あつて、

深く無際に入り、一切未曾有の法を成就せり。

絶言歎二智・絶言歎理由舍利弗、如来は能く種種に分別し、巧みに諸法を説き、言

辞柔軟にして衆の心を悦可せしむ。舍利弗、要を取つて之

を言わば、無量無辺未曾有の法を、ほとけことごと仏悉く成就したまえ

り。正絶言歎・正絶言歎止みなん 舍利弗、須らく復説くべからず。最上人成就二智故不所以は何ん。

可説仏の成就したまえる所は、だいいちけうなんげ第一希有難解の法なり。唯、ただ仏

と仏と、ほとけ乃し能く諸法の実相を究尽したまえり。諸法実相理甚深所謂諸法

故不可説

の如に是よ相そう、如に是よ性しやう、如に是よ体たい、如に是よ力りき、如に是よ作さ、如に是よ因いん、如に

是ぜ縁えん、如に是よ果か、如に是よ報ほう、如に是よ本ほん末まつ究きう竟きやう等とうなり。

爾その時ときに世せ尊そん、重かさねて此この義ぎを宣のべんと欲ほつして、偈げを説といて

言のたまわく、

頌寄言歎

世せ雄おうは量はかるべからず 諸しよ天てん及および世せ人にん

一いつ切さい衆しゆ生じやうの類たぐひ 能よく仏ほとけを知しる者もの無なし

仏ほとけの力りき無む所しよ畏い 解げ脱だつ諸しよの三さん昧まい

及および仏ほとけの諸しよ余よの法ほうは 能よく測しきり量りやうする者もの無なし

本もと無む数しゆの仏ほとけに從したがつて 具ぐ足そくして諸しよの道どうを行ぎじたまえり

甚じん深じん微み妙みやくの法ほうは 見み難がたく了りすべきこと難かたし

無む量りやう億おく劫こくに於おいて 此この諸しよの道どうを行ぎじ已おわつて

道どう場じやうにして果かを成じやうずることを得えて 我われ已すでに悉ことごとく知ち見けんす

頌絶言歎・頌諸法実相絶言
是の如き大果報 種種の性相の義

我及び十方の仏 乃し能く是の事を知しめせり

是の法は示すべからず 言辞の相寂滅せり

示除仏不能知実相・總舉不知能知
諸余の衆生の類 能く得解すること有ること無し

諸の菩薩衆の 信力堅固なる者をば除く

諸仏の弟子衆の 曾て諸仏を供養し

一切の漏已に尽くして 是の最後身に住せる

是の如き諸人等 其の力堪えざる所なり

仮使世間に満てらん 皆舍利弗の如くにして

思を尽くして共に度量すとも 仏智を測ること能わじ

正使十方に満てらん 皆舍利弗の如く

及び余の諸の弟子 亦十方の刹に満てらん

おもいつ 思を尽くして共に度量すとも 亦復またまたし知ること能あたわじ

縁びやくしおつ覺乘不知 辟支りち仏の利智にして 無漏むろの最後身さいごしんなる

またじつぼうかい 亦十方界に満ちて 其その数竹林かずちくりんの如ごとくならん

こ 斯れ等共に一心に 億無量劫おくむりようこくに於おいて

ほとけ 仏の実智じつちを思おもわんと欲ほつすとも 能よく少分しょうぶんをも知ること莫なけん

菩薩乘不知 新發意の菩薩 無数の仏ほとけを供養くようし

もろもろざ 諸の義趣しゆを了達りようだつし 又能また善よく法ほうを説とかんもの

とうま 稻麻竹葦ちくいの如ごとくにして 十方じつほうの刹くに充満じゆうまんせん

いつしん 一心に妙智みょうちを以もつて 恒河沙劫ごうがしやこくに於おいて

ことごとみなとも 咸く皆共に思量しりようすとも 仏智ぶつちを知ること能あたわじ

ふたい 不退の諸の菩薩 其その数恒沙かずごうじやの如ごとくにして

いつしん 一心しんに共に思求しぐすとも 亦復またまたし知ること能あたわじ

説釈迦与仏能知
又舍利弗に告げたまわく 無漏不思議の

甚深微妙の法を 我今已に具え得たり

唯我の相を知れり 十方の仏も亦然なり

正略開三顯一動執生疑・示諸仏顕実
舍利弗当に知るべし 諸仏は語異なること無し

仏の所説の法に於いて 当に大信力を生ずべし

世尊は法久しくして後 要ず当に眞実を説きたもうべし

示釈迦開三
諸の声聞衆 及び縁覺乗を求むるものに告ぐ

我苦縛を脱し 涅槃を逮得せしめたることは

仏方便力を以って 示すに三乗の教を以ってす

衆生の処処の著 之を引いて出づることを得せしめんとなり

勝疑致請・叙疑・拳疑人
爾の時に大衆の中に、 諸の声聞、漏尽の阿羅漢、阿若憍陳

如等の千二百人、 及び声聞、辟支仏の心を發せる比丘、比丘

正叙疑念
尼、優婆塞、優婆夷有り、各是の念を作さく、

疑仏二智
今者世尊、何が故ぞ、慇懃に方便を称歎して、是の言を作

したもう。仏の得たまえる所の法は、甚深にして解し難く、

言説したもう所有るは、意趣知り難し。一切の声聞、辟支

仏の及ぶこと能わざる所なり。

疑自己所得
仏、一解脱の義を説きたまいしかば、我等も亦、此の法を

得て涅槃に到れり。而るに、今、是の義の所趣を知らず。

正請決・第一請・長行
爾の時に舍利弗、四衆の心の疑を知り、自らも亦未だ了せず

して、仏に白して言さく、

世尊、何の因、何の縁あつてか、慇懃に諸仏第一の方便、

甚深微妙難解の法を称歎したもう。我昔より来、未だ曾て、

仏に従つて是の如き説を聞きたてまつらず。今者四衆、咸

く皆疑有り、唯、願わくは世尊、斯の事を敷演したまえ。

世尊、何が故ぞ、慇懃に甚深微妙難解の法を称歎したもう。

爾の時に舍利弗、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説い

て言さく、

頌疑実智

慧日大聖尊 久しくあつて乃し是の法を説きたもう

頌疑施智

自らは是の如き 力無畏 三昧

禅定 解脱等の 不可思議の法を得たりと説きたもう

道場所得の法は 能く問を發す者無し

我が意測るべきこと難し 亦能く問う者無し

問うこと無けれども而も自ら説いて 所行の道を称歎したもう

智慧甚だ微妙にして 諸仏の得たまえる所なり

明三乘四衆疑

無漏の諸の羅漢 及び涅槃を求むる者

今皆疑網に墮しぬ 仏何が故ぞ是れを説きたもう

其の縁覚を求むる者 比丘比丘尼

諸の天龍鬼神 及び乾闥婆等

相視て猶予を懷き 両足尊を瞻仰す

是の事云何なるべき 願わくは仏為に解説したまえ

諸の声聞衆に於いて 仏我を第一なりと説きたもう

我今自ら智に於いて 疑惑して了すること能わず

是れ究竟の法とや為ん 是れ所行の道とや為ん

仏口所生の子 合掌瞻仰して待ちたてまつる

願わくは微妙の音を出して 時に為に実の如く説きたまえ

諸の天龍神等 其の数恒沙の如し

仏を求むる諸の菩薩 大数八万有り

又諸の万億国の 轉輪聖王の至れる

合掌し敬心を以て 具足の道を聞きたてまつらんと欲す

第二止 爾の時に仏、舍利弗に告げたまわく、

止みなん、止みなん、復説くべからず。若し是の事を説か

ば、一切世間の諸天及び人、皆当に驚疑すべし。

第二請長行 舍利弗、重ねて仏に白して言さく、

世尊、唯願わくは之を説きたまえ。唯願わくは之を説きた

まえ。所以は何ん。是の会の無数百千万億阿僧祇の衆生は、

曾て諸仏を見たてまつり、諸根猛利にして、智慧明了なり。

仏の所説を聞きたてまつらば、則ち能く敬信せん。

爾の時に舍利弗、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説い

て言さく、

偈頌 ほうおうむじようせん 法王無上尊 ただと 唯説きたまえ願わくは慮うらおもいしたもうこと勿なかれ

是この会えの無量むりようの衆しゆは 能よく敬信きやうしんすべき者もの有あり

第三止・長行
ほとけまた 仏復い

止やみなん舍利弗しやりほつ、若もし是この事じを説とかば、一切世間いっさいせけんの天てん、人にん、阿修羅あしゅら、皆みな當まさに驚疑きやうぎすべし。増上慢ぞうじやうまんの比丘びくは將まさに大坑だいきやうに墜おつべし。

爾その時ときに世尊せそん、重かさねて偈げを説といて言のたまわく、

偈頌

止やみなん止やみなん須すべく説とくべからず 我わが法ほうは妙みやうにして思おもひ難がたし

諸もろもろの増上慢ぞうじやうまんの者ものは 聞きいて必かならず敬信きやうしんせじ

第三請・長行

爾その時ときに舍利弗しやりほつ、重かさねて仏ほとけに白もうして言もうさく、

世尊せそん、唯願ただねがわくは之これを説ときたまえ。唯願ただねがわくは之これを説ときた

まえ。今いま、此この会中えちゆうの我わが如ごとき等比百千万億たぐいひやくせんまんのくなるは、世世せせに

已すでに曾かつて仏ほとけに從したがいたてまつりて化けを受うけたり。此かくの如ごとき人にん

等、必ず能く敬信し、長夜安穩にして饒益する所多からん。

爾の時に舍利弗、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説い

て言さく、

偈頌

無上兩足尊 願わくは第一の法を説きたまえ

我は為れ仏の長子なり 唯分別し説くことを垂れたまえ

是の会の無量の衆は 能く此の法を敬信せん

仏已に曾て世世に 是の如き等を教化したまえり

皆一心に合掌して 仏語を聴受せんと欲す

我等千二百 及び余の仏を求むる者あり

願わくは此の衆の為の故に 唯分別し説くことを垂れたまえ

是れ等此の法を聞きたてまつらば 則ち大歡喜を生ぜん

広開三顯一・法説周・正説・長行・仏許請

爾の時に世尊、舍利弗に告げたまわく、

汝^{なんじ}已^{すで}に慰^{なぐさ}懃^{ごん}に三^みたび請^{じよう}じつ。豈^{あに}説^とかざることを得^えんや。汝^{なんじ}今^{いま}諦^{あきら}かに聴^きき、善^よく之^{これ}を思^し念^{ねん}せよ。吾^{われ}当^{まさ}に汝^{なんじ}が為^{ため}に分^{ぶん}別^{べつ}し

解説^{げせつ}すべし。

叙^こ増^み上^{じよう}慢^{まん}衆^{しゆ}退^{たい}去^こ

此^この語^ごを説^ときたもう時^{とき}、会^き中^{ちゆう}に比^ひ丘^{きう}、比^ひ丘^{きう}尼^に、優^う婆^ば塞^{そく}、優^う婆^ば

夷^い五^ご千^{せん}人^{にん}等^{とう}有^あり。即^{すな}ち座^ざより起^たつて仏^{ほとけ}を礼^{らい}して退^{しりぞ}きぬ。所以^{ゆえん}

は何^{いか}ん。此^この輩^{とも}は罪^{ざい}根^{こん}深^{じん}重^{じゆう}に、及^{およ}び増^{ぞう}上^{じよう}慢^{まん}に^{して}、未^{いま}だ得^え

ざるを得^えたりと謂^{おも}い、未^{いま}だ証^{しょう}せざるを証^{しょう}せりと謂^{おも}えり。此^{かく}の

如^{ごと}き失^{とが}あり。是^こを以^もつて住^{じゆう}せず。世^せ尊^{そん}默^{もく}然^{ねん}として制^{せい}止^ししたま

わす。爾^その時^{とき}に仏^{ほとけ}、舎^{しや}利^り弗^{ふつ}に告^つげたまわく、

我^わが今^{いま}此^この衆^{しゆ}は復^{また}枝^し葉^{えふ}無^なく、純^{もつ}ら貞^{じよう}実^{じつ}のみあり。舎^{しや}利^り弗^{ふつ}、

是^{かく}の如^{ごと}き増^{ぞう}上^{じよう}慢^{まん}の^{ひと}は、退^{しりぞ}くも亦^{また}佳^よし。汝^{なんじ}今^{いま}善^きく聴^きけ。当^{まさ}

に汝^{なんじ}が為^{ため}に説^とくべし。

受旨然諸
舍利弗の言さく、

唯然なり。世尊、願樂わくは聞きたてまつらんと欲す。

正説五仏章・總諸仏章・歎法希有
仏、舍利弗に告げたまわく、

是の如き妙法は、諸仏如来、時に乃し之を説きたもう。優

曇鉢華の時に一たび現ずるが如きのみ。舍利弗、汝等当に

信ずべし。仏の所説は、言虚妄ならず。舍利弗、諸仏の随

宜の説法は意趣解し難し。所以は何ん。我、無數の方便、

種種の因縁、譬喩の言辞を以って諸法を演説す。是の法は

思量分別の能く解する所に非ず。唯諸仏のみ有して、乃し

能く之を知しめせり。所以は何ん。諸仏世尊は、唯一大事

の因縁を以っての故に、世に出現したもう。舍利弗、云何

なるをか諸仏世尊は、唯一大事の因縁を以っての故に、世

に出現しゅつげんしたもうと名なづくる。諸しよ仏ぶつ世尊せそんは、衆生しゆじやうをして仏知ぶつち見けんを開ひらかしめ、清淨しやうじやうなるを得えせしめんと欲ほつするが故ゆゑに世よに出現しゅつげんしたもう。衆生しゆじやうに仏知見ぶつちけんを示しめさんと欲ほつするが故ゆゑに、世よに出現しゅつげんしたもう。衆生しゆじやうをして、仏知見ぶつちけんを悟さとらしめんと欲ほつするが故ゆゑに、世よに出現しゅつげんしたもう。衆生しゆじやうをして、仏知見ぶつちけんの道どうに入いらしめんと欲ほつするが故ゆゑに、世よに出現しゅつげんしたもう。舍利弗しやりほつ、是これを諸しよ仏ぶつは唯ただ一大事いちだいじの因縁いんねんを以もつての故ゆゑに、世よに出現しゅつげんしたもうと為なづく。

明人めいじん一一、
仏ほとけ、舍利弗しやりほつに告つげたまわく、

諸しよ仏ぶつ如來にょらいは但ただ菩薩ぼさつを教化きやうけしたもう。諸しよの所作しよさ有あるは常つねに一いち事じの爲ためなり。唯ただ仏ほとけの知見ちけんを以もつて、衆生しゆじやうに示悟しじこしたまわんとなり。明教めいけう一一、
舍利弗しやりほつ、如來にょらいは但ただ一いち仏乘ぶつじやうを以もつての故ゆゑに、衆生しゆじやうの

為に法を説きたもう。余乗の若しは二、若しは三有ること

無し。舍利弗、一切十方の諸仏の法も亦是の如し。

過去仏章

舍利弗、過去の諸仏も、無量無數の方便、種種の因縁、譬

喩の言辞を以って、衆生の為に諸法を演説したもう。是の

法も皆一仏乗の為の故なり。是の諸の衆生の、諸仏に従

いたてまつって法を聞かんも、究竟して皆一切種智を得た

り。

未來仏章

舍利弗、未來の諸仏の、当に世に出でたもうべきも亦無量

無數の方便、種種の因縁、譬喩、言辞を以って、衆生の為

に諸法を演説したもう。是の法も、皆一仏乗の為の故なり。

是の諸の衆生の諸仏に従いたてまつって法を聞かんも、究

竟して皆一切種智を得べし。

現在げんざい仏章ぶつしょう

舍利弗しやりふつ、現在げんざい十方じつぱうの無量むりやう百千萬億ひやくせんまんおくの仏土ぶつどの中の諸しよ仏世尊ぶつせそんの、

衆生しゆじやうを饒益にやうやくし安樂あんらくならしめたもう所ところ多おほき、是この諸しよ仏も、亦また

無量むりやう無数むしゆの方便ほうべん、種種しゆじゆの因縁いんねん、譬喩ひゆ、言辭ごんじを以もつて、衆生しゆじやう

の爲ために諸法しよほうを演説えんぜつしたもう。是この法ほうも、皆みな一仏乘いちぶつじやうの爲ための故ゆゑ

なり。是この諸しよの衆生しゆじやうの、仏ほとけに従したがいたてまつりて法ほうを聞きける

も、究竟くきやうして皆みな一切種智いつしゆちを得う。舍利弗しやりふつ、是この諸しよ仏ぶつは、但ただ菩薩ぼさつを

教化きやうけしたもう。仏ほとけの知見ちけんを以もつて衆生しゆじやうに示しめさんと欲ほつするが

故ゆゑに、仏ほとけの知見ちけんを以もつて衆生しゆじやうに悟さとらしめんと欲ほつするが故ゆゑに、

衆生しゆじやうをして仏ほとけの知見ちけんの道どうに入いらしめんと欲ほつするが故ゆゑなり。

釈迦しやけ仏章ぶつしょう・開權かいけん

舍利弗しやりふつ、我われも今亦復いままたまた是この如ごとし。諸しよの衆生しゆじやうに、種種しゆじゆの欲よく、深じん

心しんの所著しよじやく有あることを知しつて、其その本性ほんじやうに随したがつて、種種しゆじゆの因いん

縁ねん、譬喩ひゆ、言辭ごんじ、方便力ほうべんりきを以もつての故ゆゑに、而しかも爲ために法ほうを説と

頭実

く。舍利弗、此の如きは、皆一仏乗の一切種智を得せしめ

んが為の故なり。舍利弗、十方世界の中には、尚二乗無し、

何に況や三有らんや。舍利弗、諸仏は五濁の惡世に出でた

もう。所謂劫濁、煩惱濁、衆生濁、見濁、命濁なり。

是の如し。舍利弗、劫の濁乱の時は、衆生垢重く、慳貪

嫉妬にして、諸の不善根を成就するが故に、諸仏、方便力を

以つて、一仏乗に於いて分別して三と説きたもう。舍利弗、

若し我が弟子、自ら阿羅漢、辟支仏なりと謂わん者、諸仏

如来の、但菩薩を教化したもう事を聞かず知らずんば、此

れ仏弟子に非ず、阿羅漢に非ず、辟支仏に非ず。又舍利弗、

是の諸の比丘、比丘尼、自ら已に阿羅漢を得たり。是れ最

後身なり。究竟の涅槃なりと謂いて、便ち復阿耨多羅三藐

三菩提を志求せざらん。当に知るべし、此の輩は、皆是れ

増上慢の人なり。所以は何ん。若し比丘の実に阿羅漢を得

たる有つて、若し此の法を信ぜずといわば、是の処有ること

無けん。仏の滅度の後、現前に仏無からんをば除く。所以

は何ん。仏の滅度の後に是の如き等の經を受持し、読誦し、

其の義を解せん者、是の人得難ければなり。若し余仏に遇

わば、此の法の中に於いて、便ち決了することを得ん。舎

利弗、汝等当に一心に信解し、仏語を受持すべし。諸仏如

来は言虚妄無し。余乗有ること無く、唯一仏乗のみなり。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて

言わく、

頌許答

比丘比丘尼の 増上慢を懷くこと有る

優婆塞の我慢なる 優婆夷の不信なる

是の如き四衆等 其の數五千有り

自ら其の過を見ず 戒に於いて欠漏有つて

其の瑕疵を護り惜しむ 是の小智は已に出でぬ

衆中の糟糠なり 仏の威徳の故に去りぬ

斯の人は福德尠くして 是の法を受くるに堪えず

此の衆は枝葉無し 唯諸の貞実のみ有り

舍利弗善く聴け 諸仏所得の法は

無量の方便力をもつて 衆生の為に説きたもう

衆生の心の所念 種種の所行の道

若干の諸の欲性 先世の善惡の業

仏悉く是れを知しめし已つて 諸の縁譬喩

言辭方便力を以つて 一切をして歡喜せしめたもう

或は修多羅 伽陀及び本事

本生未曾有を説き 亦因縁

譬喩並びに祇夜 優婆提舍經を説きたもう

鈍根にして小法を樂い 生死に食著し

諸の無量の仏に於いて 深妙の道を行ぜずして

衆苦に悩亂せらる 是れが爲に涅槃を説きたもう

願美・頌理一 我是の方便を設けて 仏慧に入ることを得せしむ

未だ曾て汝等 当に仏道を成ずることを得べしと説かず

未だ曾て説かざる所以は 説時未だ至らざる故なり

今正しく是れ其の時なり 決定して大乘を説く

我が此の九部の法は 衆生に随順して説く

大乘に入るに爲れ本なり 故を以て是の經を説く

類人一
仏子の心淨く 柔輭に亦利根にして

無量の諸仏の所にして 深妙の道を行ずる有り

此の諸の仏子の為に 是の大乗經を説く

我是の如き人 来世に仏道を成ぜんと記す

深心に仏を念じ 淨戒を修持するを以つての故に

此れ等仏を得べしと聞いて 大喜身に充遍す

仏彼の心行を知れり 故に為に大乘を説く

声聞若しは菩薩 我が所説の法を聞くこと

乃至一偈に於いてもせば 皆成仏せんこと疑い無し

十方仏土の中には 唯一乗の法のみ有り

二無く亦三無し 仏の方便の説をば除く

但仮の名字を以つて 衆生を引導したもう

願行一
仏の智慧を説かんが故なり 諸仏世に出でたもうには

唯此の一事のみ実なり 余の二は則ち真に非ず

終に小乗を以って 衆生を済度したまわず

仏は自ら大乘に住したまえり 其の所得の法の如き

定慧の力莊嚴せり 此れを以って衆生を度したもう

自ら無上道 大乘平等の法を証して

若し小乗を以って化すること 乃至一人に於いてもせば

我則ち慳貪に墮せん 此の事は為めて不可なり

若し人仏に信帰すれば 如来欺誑したまわず

亦貪嫉の意無し 諸法の中の悪を断じたまえり

故に仏十方に於いて 独り畏るる所無し

我相を以って身を嚴り 光明世間を照らす

無量の衆に尊まれて

為に実相の印を説く

舎利弗当に知るべし

我本誓願を立てて

一切の衆をして

我が如く等しくして異ること無からしめんと欲しき

誓願満足

我が昔の所願の如き

今者は已に満足しぬ

一切衆生を化して

皆仏道に入らしむ

明為五濁説小乗・華總五濁

若し我衆生に遇えば

尽く教うるに仏道を以つてす

無智の者は錯乱し

迷惑して教えを受けず

我知んぬ此の衆生は

未だ曾て善本を修せず

堅く五欲に著して

癡愛の故に悩みを生ず

諸欲の因縁を以つて

三惡道に墜墮し

六趣の中に輪廻して

備さに諸の苦毒を受く

命濁

受胎の微形

世世に常に増長し

薄徳少福の人として 衆苦に逼迫せらる

見濁 邪見の稠林 若しは有若しは無等に入り

此の諸見に依止して 六十二を具足す

煩悩濁 深く虚妄の法に著して 堅く受けて捨つべからず

我慢にして自ら矜高し 諂曲にして心不実なり

劫濁 千万億劫に於いて 仏の名字を聞かず

またしようほうき 亦正法を聞かず 是の如き人は度し難し

為五濁説小乗 是の故に舍利弗 我為に方便を設けて

諸の尽苦の道を説き 之に示すに涅槃を以つてす

明説小乗終為大乘 我涅槃を説くと雖も 是れ亦真の滅に非ず

諸法は本より来 常に自ら寂滅の相なり

仏子道を行じ已つて 来世に作仏することを得ん

頌眞実不虛妄
我方便力有りて

三乗の法を開示す

一切の諸の世尊も

皆一乗の道を説きたもう

今此の諸の大衆

皆心に疑惑を除くべし

諸仏は語異なること無し

唯一にして二乗無し

過去無数劫の

無量の滅度の仏

百千万億種にして

其の数量るべからず

是の如き諸の世尊も

種種の縁譬喩

無数の方便力をもつて

諸法の相を演説したまいき

是の諸の世尊等も

皆一乗の法を説き

無量の衆生を化して

仏道に入らしめたまいき

又諸の大聖主 一切世間の

天人群生類 深心の所欲を知しめして

更に異いの方便ほうべんを以もつて 第一義だいいちぎを助顯じよけんしたまいき

別明・菩薩乘ぼくさじやう一

若もし衆生しゆじやう類有あるつて 諸もろの過去かこの仏ほとけに値あいたてまつつて

若もしは法ほうを聞きいて布施ふせし 或あるは持戒忍辱かいにんにく

精進しやうじん禪智等ぜんちとう 種種しゆじゆに福德ふくとくを修しゆせし

是かくの如ごとき諸人等しよにんら 皆みな已すでに仏道ぶつどうを成じやうじき

二乘じふ一

諸仏滅度しよぶつめつどし已おほつて 若もし人善軟ひとぜんなんの心こころありし

是かくの如ごとき諸もろの衆生しゆじやう 皆みな已すでに仏道ぶつどうを成じやうじき

人天乘じんてんじやう一

諸仏滅度しよぶつめつどし已おほつて 舍利しゃりを供養くやうする者もの

万億種まんじふしゆの塔とうを起たてて 金銀及きんぎんび頗黎はり

碑しやこ磔めつと礪め礪め、玫瑰瑠璃珠まいえるりしゆとをもつて

清淨しやうじやうに広ひろく嚴飾ごんじきし 諸もろの塔とうを莊校しやうきやうし

或あるは石廟しやくみやうを起たて 栴檀せんたん及および沈水じんすい

木密並びに余の材 甄瓦泥土等をもつてする有り

若しは曠野の中に於いて 土を積んで仏廟を成し

乃至童子の戯れに 沙を聚めて仏塔と為せる

是の如き諸人等 皆已に仏道を成じき

若し人仏の爲の故に 諸の形像を建立し

刻彫して衆相を成せる 皆已に仏道を成じき

或は七宝を以って成し 鍮 鉞 赤 白 銅

白鐵及び鉛錫 鉄木及与び泥

或は膠漆布を以って 嚴飾して仏像を作れる

是の如き諸人等 皆已に仏道を成じき

緋画して仏像の 百福莊嚴の相を作すこと

自らも作し若しは人をしてもせる 皆已に仏道を成じき

乃至童子ないしどうじの戯たわむれに 若もしは草木そうもく及び筆ふで

或あるは指ゆびの爪そうこう甲もを以もつて 画えがいて仏像ぶつぞうを作なせる

是かくの如ごとき諸人等しよにんら 漸ぜん漸ぜんに功徳くどくを積つみ

大だい悲ひ心しんを具ぐ足そくして 皆みな已すでに仏道ぶつどうを成じじき

但ただ諸もろの菩薩ぼさつを化けし 無量むりようの衆しゆを度脱どだつしき

若もし人塔廟ひととうみよう 宝像ほうぞう及び画像えぞうに於おいて

華香旛蓋けこうばんがいを以もつて 敬心きやうしんにして供養くようし

若もしは人ひとをして樂がくを作なさしめ 鼓つづを撃みち角貝かくばいを吹ふき

簫しょう笛ちやく琴きん笙きんくう篳び篥わ鏡きやう銅どう鈸ぱつ

是かくの如ごとき衆もろの妙音みようおん 尽ことごとく持もつて以もつて供養くようし

或あるは歡喜かんぎの心こころを以もつて 歌唄かばいして仏徳ぶつとくを頌じゆし

乃至ないし一小音いっしょうおんをもつてせし 皆みな已すでに仏道ぶつどうを成じじき

若し人散乱の心に 乃至一華を以て

画像に供養せし 漸く無数の仏を見たてまつりき

或は人有りて礼拝し 或は復但合掌し

乃至一手を挙げ 或は復小し頭を低れて

此れを以て像に供養せし 漸く無量の仏を見たてまつり

自ら無上道を成じて 広く無数の衆を度し

無余涅槃に入ること 薪尽きて火の滅ゆるが如くなりき

若し人散乱の心に 塔廟の中に入つて

一たび南無仏と称せし 皆已に仏道を成じき

諸の過去の仏 現在或は滅後に於いて

若し是の法を聞くこと有りし 皆已に仏道を成じき

頌未來仏章・開三
未來の諸の世尊 其の數量有ること無けん

是の諸の如来等も 亦方便して法を説きたまわん

一切の諸の如来 無量の方便を以って

諸の衆生を度脱して 仏の無漏智に入れたまわん

若し法を聞くこと有らん者は 一りとして成仏せずということ無けん

諸仏の本誓願は 我が所行の仏道

普く衆生をして 亦同じく此の道を得せしめんと欲す

未来世の諸仏 百千億

無数の諸の法門を説きたもうと雖も 其れ実には一乗の爲なり

諸仏両足尊 法は常に無性なり

仏種は縁によつて起ると知しめす 是の故に一乗を説きたまわん

是の法は法位に住して 世間の相常住なり

道場に於いて知しめし已つて 導師方便して説きたまわん

頌現在仏章・述出現意

天人の供養したてまつる所の 現在十方の仏

其の数恒沙の如く 世間に出現したもうも

衆生を安穩ならしめんが故に 亦是の如き法を説きたもう

第一の寂滅を知しめして 方便力を以つての故に

種種の道を示すと雖も 其れ実には仏乗の爲なり

衆生の諸行 深心の所念

過去所習の業 欲性精進力

及び諸根の利鈍を知しめして 種種の因縁

譬喩亦言辞を以つて 応に随つて方便して説きたもう

今我も亦是の如し 衆生を安穩ならしめんが故に

種種の法門を以つて 仏道を宣示す

我智慧力を以つて 衆生の性欲を知つて

方便ほうべんして諸法しよほうを説といて 皆みな歡喜かんぎすることを得えせしむ

廣ひろ頌じゆ六ろく義ぎ・頌じゆ五ご濁だく

舍利弗しやりふ當たうに知しるべし 我われ仏眼ぶつげんを以もつて觀かんじて

六道ろくどうの衆生しゆじやうを見るに 貧窮びんぐにして福慧ふくえ無なし

生死しやうじの險道けんどうに入りて 相續さうぞくして苦斷くたえず

深ふかく五欲ごよくに著じやくすること 犂牛みようこの尾おを愛あいするが如ごとし

貪愛とんないを以もつて自みづから蔽おほい 盲瞶もうみやうにして見みる所ところ無なし

大勢だいせいの仏ほとけ 及および斷苦だんくの法ほうを求もとめず

深ふかく諸もろもろの邪見じやけんに入りて 苦くを以もつて苦くを捨すてんと欲ほつす

是この衆生しゆじやうの爲ための故ゆえに 而しかも大悲心だいひしんを起おこしき

開權かいけん・明無機不能説めいむきふたふた大乘だいじやう・明擬宜以大乘めいぎいだいだいじやう

我われ始はじめ道場どうじやうに坐ざし 樹じゆを觀かんじ亦また經行きやうぎやうして

三七日さんしちにちの中なかに於おいて 是かくの如ごとき事じを思惟しゆいしき

我わが所得しよとくの智慧ちえは 微妙みみやうにして最もつとも第一だいいちなり

明於衆無大乘機

衆生の諸根鈍にして 樂に著し癡に盲いられたり

斯の如きの等類 云何がして度す可きと

爾の時に諸の梵王 及び諸の天帝釈

護世四天王 及び大自在天

並びに余の諸の天衆 眷属百千万

恭敬合掌し礼して 我に転法輪を請ず

我即ち自ら思惟すらく 若し但仏乗を讚めば

衆生苦に没在し 是の法を信すること能わじ

法を破して信ぜざるが故に 三惡道に墜ちなん

我寧ろ法を説かずとも 疾く涅槃にや入りなん

明順諸仏説三乘応機・明正用三乘・明擬宜以三乗
尋いで過去の仏の 所行の方便力を念うに

我が今得る所の道も 亦応に三乗と説くべし

明有三乘機・明諸仏讃同

是の思惟を作す時 十方の仏皆現じて

梵音をもつて我を慰諭したもう 善い哉釈迦文

第一の導師 是の無上の法を得たまえども

諸の一切の仏に随つて 方便力を用いたもう

我等も亦皆 最妙第一の法を得れども

諸の衆生類の為に 分別して三乗と説く

少智は小法を樂つて 自ら作仏せんことを信ぜず

是の故に方便を以つて 分別して諸果を説く

復三乗を説くと雖も 但菩薩を教えんが為なりと

舍利弗当に知るべし 我聖師子の

深淨微妙の音を聞いて 喜んで南無仏と称す

復是の如き念を作す 我濁惡世に出でたり

諸仏しよぶつの所説しよせつの如ごとく 我われも亦また随順ずいじゆんして行ぎやうぜんと

明施めいし化くわ 是この事じを思惟しゆいし已おわつて 即すなわち波羅奈はらなに趣おもむく

諸法寂滅しよほうじやくめつの相そうは 言ことばを以もつて宣のぶべからず

方便ほうべん力を以もつての故ゆゑに 五比丘ごびくの為ために説ときぬ

明所化受教悟入めいしよくわじやうこくご 是これを転法輪てんぽうりんと名なづく 便すなわち涅槃ねはんの音こゑ

及および阿羅漢あらかん 法僧差別ほうそうしやべつの名な有あり

久遠劫くおんこくより来このかた 涅槃ねはんの法ほうを讃示さんじして

生死しやうじの苦く永ながく尽つくすと 我常われつねに是かくの如ごとく説ときき

舍利弗しやりふ当ひとに知しるべし 我われ仏子ぶつし等らを見みるに

仏道ぶつどうを志求しぐする者ものの 無量むりやうせんまん千万億

咸ことごとく恭敬きやうぎやうの心こころを以もつて 皆みな仏所ぶつしよに來至らいしせり

曾かつて諸仏しよぶつに從したがいたてまつつて 方便所説ほうべんしよせつの法ほうを聞きけり

頌理一
我即ち是の念を作さく
如来出でたる所以は

仏慧を説かんが為の故なり
今正しく是れ其の時なり

舍利弗当に知るべし
鈍根小智の人

著相憍慢の者は
是の法を信ずること能わず

今我喜んで畏れ無し
諸の菩薩の中に於いて

正直に方便を捨てて
但無上道を説く

菩薩是の法を聞いて
疑網皆已に除く

千二百の羅漢
悉く亦当に作仏すべし

三世の諸仏の
説法の儀式の如く

我も今亦是の如く
無分別の法を説く

諸仏世に興出したもうこと
懸遠にして値遇すること難し

正使世に出でたもうとも
是の法を説きたもうこと復難し

無量無數劫にも 是の法を聞くこと亦難し

能く是の法を聴く者 斯の人亦復難し

譬えば優曇華の 一切皆愛樂し

天人の希有にする所として 時時に乃し一たび出するが如し

法を聞いて歡喜し讚めて 乃至一言をも發せば

則ち為れ已に 一切三世の仏を供養するなり

是の人甚だ希有なること 優曇華に過ぎたり

汝等疑い有ること勿れ 我は為れ諸法の王

普く諸の大衆に告ぐ 但一乗の道を以って

諸の菩薩を教化して 声聞の弟子無し

汝等舍利弗 声聞及び菩薩

当に知るべし是の妙法は 諸仏の秘要なり

五濁の惡世には 但諸欲に樂著せるを以つて

是の如き等の衆生 終に仏道を求めず

当來世の惡人は 仏説の一乘を聞いて

迷惑して信受せず 法を破して惡道に墮せん

慙愧清淨にして 仏道に志求する者有らば

當に是の如き等の爲に 広く一乘の道を讀むべし

舍利弗當に知るべし 諸仏の法是の如く

万億の方便を以つて 宜しきに随つて法を説きたもう

其の習學せざる者は 此れを曉了すること能わじ

汝等既已に 諸仏の世の師の

隨宜方便の事を知りぬ 復諸の疑惑無く

心に大歡喜を生じて 自ら當に作仏すべしと知れ

妙法蓮華經卷第一

みようほうれんげきようかんだいいち